

第68回演奏会のプログラムに「悲劇的ヴィオラ考」を掲載したら、思わぬ反響があった。「ヴァイオリンの語源がヴィオラだとは知らなかった」「これからはヴィオラにも耳を傾けたい」などの意見をいただいた。

ヴィオラは、表だって旋律を弾くことがない「縁の下の力持ち」として常に扱われてきた。味噌汁の出汁のようなもので、無くては味気ないが、けして主役にはしてもらえないのである。ヨハン・シュベートのワルツやポルカに至っては、チェロが旋律を弾くのを横目に始終「後打ち」ばかりやっている。後打ち仲間の第2Vn（ヴァイオリン）は、途中で裏切って旋律に回ったりするのだが…。ヴィオラとはそれほど哀れな楽器である。筆者は考える。「縁の下の力持ち」だったたまにはスポットを浴びてもいいのではないかと。

ヴィオラの音色は暗い面とおどけた面の相対する両面を持っており独特である。中にはそんなヴィオラの特性が活かされ、活躍する曲もある。今回は、そんな曲を書いた救世主的作曲家にスポットを当ててみた。

第1幕 ヴィオラ的名曲～旋律（メロディ）を弾くヴィオラ

ヴィオラもまれにではあるが、旋律を弾かされることがある。しかし、ヴィオラ奏者は、旋律がないことにいつも不満を言っているくせに、いざ旋律が出てくると緊張して失敗する。実は旋律が苦手なのである。

- ①ラフマニノフ：ヴィオラが好きだったのか、断片的な旋律を多く与えている。特にピアノ協奏曲第2番では、第3楽章の第二主題をヴィオラに弾かせている。この曲は珍しくチェロよりヴィオラの方が活躍する。
- ②チャイコフスキー：ヴァイオリンの1又は2オクターヴ下でユニゾンで旋律を弾くことが多いが、単独の旋律もある。交響曲第1番の第1楽章や第2楽章にはヴィオラの奏でる切ない旋律がある。第6番「悲愴」第1楽章の序奏から主部にかけては、長い間ヴィオラが主役である。この部分は、第2Vnが冒頭から37小節間休みで、羨ましそうにヴィオラを見ているが、ヴィオラ奏者にとってこれが何よりもうれしい。
- ③プッチーニ：どの歌劇もヴィオラの音色の特色が場面と相まって効果的に使われている。トスカ第2幕では、ヴィオラ（ソロ）とフルート、ハープがバンダ（舞台袖等で演奏する別隊）で演奏する三重奏もある。
- ④ブルックナー：刻み（トレモロ）が多いので嫌われがちだが、オルガンの響きのように弦楽器の各パートを分け隔てなく平等に扱うので、相対的にヴィオラは面白い。交響曲第4番「ロマンティック」の第2楽章では、他の弦楽器のピチカートによる伴奏を従えて、物悲しく長〜い第二主題を弾く。
- ⑤ブラームス：内声が活躍するので、ヴィオラ奏者には人気が高い。交響曲第2番第1楽章の第二主題では、チェロの旋律の3度下でハモっている。ヴィオラがチェロより低い音を弾くことで音色的な効果を出している。第4番の第2楽章では、二部に分かれたヴィオラが朗々と旋律を歌う。

番外編 静寂の中をヴィオラだけが旋律を奏でる曲がある。エルガーのチェロ協奏曲第1楽章やマーラーの交響曲第10番（未完）である。後者の演奏前にはプロでも飯がのどに通らないほど緊張するという（某プロ奏者談）。マーラーの他の曲は、第2Vnに旋律があるのに、ヴィオラにはなく、いいところで休みが多い。

第2幕 ヴィオラ的珍曲～C線開放弦は恥ずかしい

ヴィオラのC線（一番低い弦）の音色は、ヴァイオリンにはもちろん出せないが、ふくよかなチェロとも異なり味わいがある。開放弦のC（ド）の音は独特の響きがするため、それを酷使？した曲がいくつかある。

- ①ドヴォルザーク／交響曲第8番第4楽章：中間部に「ドドドドドドッ ドドドドドドッ（繰り返し）」という（「ド」だけに）土臭いパッセージが出てくる。ヴィオラ奏者にとって最も恥ずかしい曲。
- ②ラフマニノフ／交響曲第2番第1楽章：中間部で突然「ドドドド———（繰り返し）」という運命交響曲を思わせるリズムを延べ26(18+8)回続ける。カッコいいけど疲れる。
- ③ビゼー／「アルルの女」第一組曲の第3曲「アダージェット」：冒頭、天上のようなヴァイオリンの美しい旋律の裏で「ドード———」と通奏低音のように繰り返す。これは単純だが効果的で心地よい。

（第3幕に続く）